

the Apprentice Blacksmith of Level 506

レベル596の 鍛冶見習い



Terao Yuki

寺尾友希

Illustration

うおのめうろこ

登場人物紹介

マッセイ

サイの獣人。
ほとんど喋らない重剣豪。
マツ翁と呼ばれることも。

ジェラルド

牛の獣人。
デントコーン王国の国王。
ノアにとっては叔父にあたる。

ルル

リスの獣人。
ノアのことを可愛がる
大賢者で、ララとは双子。

ララ

リスの獣人。
ノアのことを可愛がる
大盗賊で、ルルとは双子。

テリテ

熊の獣人。
ノアの家の方に住んでいる、
頼りがいのある農家の主婦。

???

ノアのことをよく知る
謎の美女。
その正体は……

ノマド

ノアの父で犬の獣人。
『神の鍛冶士』という
称号を持つ。
腕はいいが
生活能力が皆無。

ノア

14歳の犬の獣人。
凄腕鍛冶士の父に憧れ、
見習いをやっている。

01 オイラの日常は異常なようです

「父ちゃん、鍛冶ギルドから依頼が来てるよ。攻撃力500以上の、鋼の片手剣五つだって」

「へっ、この俺が、そんなナマクラなんざ打てるかよお」

「そんなこと言ったって父ちゃん、ここんとこ全然仕事してないじゃないか。二か月前の、ジェルおじさんの依頼が最後で。酒飲んでばっか」

「……オムラよお、なんで死んじまったんだよお……」

「ああ、ダメだ、寝ちゃった」

からうじてこちらを向いていた茶色い犬耳がくたりと垂れて、こたつ布団の上に黒いぐい呑みが転がる。赤い顔をしていびきをかき始めた父ちゃんの肩へ、オイラはため息交じりにそのへんに丸まっていた襦袢を被せた。

もうすぐ春とはいえ、まだ寒い。

コタツで寝ちやうのはいつものことだけど、犬の獣人のくせに、父ちゃんは寒さに弱いから……

オイラはノア。

鍛冶見習いの、十四歳。

父ちゃんと同じ、犬の獣人だ。チャームポイントは、垂れた薄茶の耳とふさふさしっぱ。垂れ耳は、犬の獣人の中じゃ人気が高いんだぞ……って、そんなことはどうでもいい。

問題は、父ちゃんだ。

父ちゃんは、『神の鍛冶士』とまで言われた、凄腕の鍛冶士だった。

……八年前、母ちゃんが死ぬまでは。

鍛冶の天才、と言えば聞こえはいいけれど、父ちゃんは鍛冶以外何も出来ないダメ人間だった。

最高の鉱石と素材（鍛冶に使うことで、攻撃力アップなどの効果が武具に付与できる特殊な魔物素材を、鍛冶士は単に『素材』と呼ぶ）、仕事場さえ用意すれば、神がかった腕で、伝説級の武器すら打てる名職人。その一方で、生活力は皆無。

鉱石や素材の仕入れ、ギルドや卸し業者との交渉をしていた元冒険者の母ちゃんが死ぬと、いい鉱石を仕入れることも出来ず、悪質な素材を高値で掴まされた。さらには、倉庫にあった高価な素材や武器も二束三文で騙し取られて、すっかり世を掬ねて酒におぼれるようになった。

今じゃ、母ちゃんのパーティメンバーだった、ジェルおじさん、ルル婆とララ婆、マッセイ翁からの依頼しか受けない始末。

母ちゃんが死んだとき、オイラは六歳。

オイラが八歳になる頃には、倉庫はガランとして何もなくなつて、酔いどれた父ちゃんの飲み代や食費は、オイラがあちこちの雑用を手伝ってもらった小遣いや食料で賄うようになっていた。

それと、たまに入る、ジェルおじさんたちからの依頼料。

でも、せっかく剣を打って、まとまったお金が入ったと思つても、こういう父ちゃんのことだから、騙されたり無駄遣いしたりおごつたりして、すぐに無一文に戻っちゃうんだけどね。人はいいんだよ、うちの父ちゃん。

父ちゃんが眠りながら抱え込むようにしていたぐい呑みを、ボロ布でぬぐつて箱膳の中へ片付けつつ、オイラはふと八歳の頃のことを思い出した。

何ヶ月も火の入っていない炉の前に座り、酔っぱらった父ちゃんがオイラに言う。

「ノア！ オリハルコン持ってい！」

……たまに依頼が入ったと思つたら、これだもんね。

まあ、父ちゃんには、鉱石や素材を仕入れる能力なんてないから、しょうがないんだけど。

「ないよ、そんなの!? うちの倉庫が空っぽなの、父ちゃんだって知ってるだろ？」

「最果ての亀裂にでも行きやあゴロゴロ転がるとるだろ」

「どこだよ、そのムチャクチャ遠そうなトコ!?」

「母ちゃんはよく行つてたぞ」

かくして、この日から、オイラの鉱石拾いと素材集めが始まった。

幸いにも、うちがあるのは王都・コーンハーベスタの外れ、『無限の荒野』のすぐ近くだった。

父ちゃんの言う、『最果ての亀裂』とかいうとこみたいのに、オリハルコン鉱石がゴロゴロ、っ

てわけにはいかなかったけれど、鉄とか銅鉱石なら普通に落ちているし、何千回かに一回、たまーに石の魔獣が、アダマンタイトやオリハルコンを落とすこともある。

そう、魔獣。

王都の北側に広がる、『無限の荒野』と『竜の棲む山脈』、『獣の森』には魔獣が出る。

魔獣を倒せば、当然、肉や素材が手に入るわけだけど……

ろくに武器もない八歳の子には、まーキツかった。

手には鍛冶場の隅に転がっていた古い金槌、背中にはボロボロのリュック、装備は父ちゃんのお古の革エプロンに革の手袋、革のブーツ。鍛冶屋仕様で、火には強いのがせめてもの防衛。ボロボロになって、せっかく拾った鉱石も素材も投げ捨てて、命からがら逃げ出したことも数知れず。

おかげで、魔法も戦闘スキルもゼロだけど、逃げ足だけは超々速くなった。

まあ、ある程度鉱石を拾えるようになって、自分で見よう見まねで剣を打つようになってからは、いくらかましになったけど。

もちろん、父ちゃんは、鍛冶なんて教えてくれない。ていうか、天才肌の父ちゃんは、人に教えるのが超下手。弟子が居ついた試しがないって、母ちゃんが嘆いていたのを覚えている。母ちゃんが死んだ後、お弟子さんの一人でもいたら、違ってたかもしれないのにね。

そんなこんなで、自分でもよく生きてたと思うけれど、鉱石や素材集めもだいぶうまくなり、オイラは十四歳になった。あと一年もすれば成人だ。

……なんでかまだよく小さい子扱いされるけど、十四歳ったら十四歳。

「父ちゃん、そろそろオイラにも、剣の打ち方、教えてよ」

「ふん、お前にゃ百年はええ。……ひつく」

「しょうがない。じゃあ、お隣のテリテおばさんに頼まれた、草刈り鎌でも作るか」

分かっちゃいたけど、こうもあっさり断られると落ち込む。肩を落とし、鍛冶場へと向かうオイラを、父ちゃんの酒に濁った目が不思議そうに見つめた。

「なんでい、ノア、お前、鎌なんて打つてたのか」

「今ごろ!? 父ちゃんの食べてるご飯分、誰が稼いでると思ってるのさ? ご近所さんの鍬とか鋤とか鉋とか斧とか。食べ物との物々交換がほとんどだけど、うちは金があつてもすぐ父ちゃんが使っちゃうから、おかげで食いっぱぐれなくてすんでるんだよ?」

「へえ」

全く反省の色のない父ちゃんに苦笑いしつつ、オイラは鍛冶場の隅に自作した、自分用の作業場へと父ちゃんを引っ張って行く。普段ならそれくらいで腰を上げたりしない父ちゃんだけれど、やつぱり鍛冶には興味があるのか、黙って付いてきてくれた。

ちなみに鍛冶場は、父ちゃんがいつもくだを巻いているコタツから、土間を挟んで反対側の屋根続き。うちは養蚕農家だったものを改造していて、馬小屋だったところが鍛冶場になわっている。養蚕農家だっただけあって、梁も柱も煤で真っ黒だ。養蚕農家っていうのは、お蚕様が凍えないよう家の中で直接火を焚くらしい。家の裏手には、蚕の守り神の蛇を祀るほこりもあったりする。

「もう五年使ってるからさ。鎌の打ち方でいいから、見てて教えてよ。えーっと、テリテおぼさんは、草が焼き払えたらいいのに、って言ってたから。まずは、マグマ石にアダマンタイト、火竜のウロコにグリフォンの羽根……」

「ちよっと待て」

材料を見た父ちゃんの頬が大きく引きつる。

あれ？

何かマズいものでも入ってたかな？

「え？ ダメ？ マグマ石をベースにすれば、雑草くらい簡単に焼き払える鎌になると思うんだけど。ああ、そっか！ これだと、小麦の収穫とかには使えないか！」

「いや、ちよっと待て！」

なぜか父ちゃんがオイラの肩をガシツと掴む。

べつに逃げるつもりはないんだけど？

「たかが草刈り鎌にマグマ石？ アダマンタイト？ まして、火竜のウロコだと!? ノア、お前、これをどこで手に入れた？」

父ちゃんの目が、なぜだか据わっている。

「どこって？ ふつうに、『竜の棲む山脈』で、火竜からプチツと」

「……ハアツつ?!」

なに当たり前のこと聞いてんの、と首を傾げたオイラとは対照的に、父ちゃんを目蓋がヒククと

引きつった。

「えっ？」

そのとたん、父ちゃんはズダダタダツとオイラを引きずって母屋へ駆け込み、仏壇前に供えてあった緊急用の魔法のクルミを拳で粉砕した。

その瞬間、ジリリリリツとベルのようなけたたましい音が鳴り響く。

「あーあ、もったいない」

あれは確か、かなり高額だったはず。母ちゃんが生きていたときから、母屋の居間に置いてあった。元は、母ちゃんが冒険者をやめるときに、パーティの全員がひとつずつ持つことにしたもので、何かあったときお互いに知らせ合うための緊急連絡の魔道具だった。

言葉を伝えることは出来ないが、その代わり、とっておきの能力がある。

なんと、無事なクルミを持つ全員を、割った者の判断で、即座に召喚出来てしまうのだ。

「聖騎士オムラが召喚する！ 勇者ジェラルド！ 大賢者ルル！ 大盗賊ララ！ 重剣豪マッセイ！ ここに来たれ！」

だれそれ？

なんか、聞いたことのない呼称きましたけど？

02 オイラのレベルは異常なようです

「ノマド!? いったい何事だ?」

「おやノアしゃん、お久しぶりじゃねえ」

「ノアしゃんもすっかり大きくなつて」

「……………」

驚いた様子のジェルおじさんに、いつも通りのルル婆、ララ婆、無口なマツ翁が土間に……と思つたけれど、よく見るとマツ翁は、しゃくれた口の際間に歯ブラシをくわえている。

急な呼び出したったもんねえ。それに、ちょうど朝ごはんの後くらのタイミングだったし。

ジェルおじさんは牛の獣人。身長は父ちゃんより頭ひとつは大きい。

ルル婆とララ婆は双子のリスの獣人。二人ともいつも魔法でふわふわと浮いている。身長は父ちゃんの半分ほどだけれど、空中でちょこんと丸まって座っているせいで、本当の身長よりずっと小さく見える。

マツ翁はサイの獣人。でかい。硬い。

「すまんが、ルル姐、ノアを鑑定してみてくれんか」

父ちゃんの言葉に、ルル婆は不思議そうにオイラのほうを見つめ、そしてピン底みたいなグルグ

ル眼鏡を巾着から取り出す。

「答えんか、ノマド! ノアがどうかしたのか!」

ジェルおじさんは母ちゃんの弟で、母ちゃんとは全く似ていないオイラを、ものすごく気にかけてくれている。

母ちゃんは透き通る金髪の美人さんだったらしいが、オイラは緑がかった稲わら頭のそばかす顔だ。恰好は八歳のときからずっと、鍛冶屋の前掛けに革のグローブ、革のブーツ。変わったのは、黒いモフモフの首巻きだけ。

父ちゃんが渋い顔をして腕を組む。

「マグマ石にアダマンタイト、おまけに火竜のウロコを使って、ご近所さんの草刈り鎌を作つていたんだ」

父ちゃんの言葉に、ジェルおじさんが眉をひそめる。

「はあ? なんでまたそんな。もったいない。ご近所さんってのは、そんな金持ちなのか?」

「いや、食い物と物々交換らしい」

「ハア!?」

ジェルおじさんがいぶかしげな顔をしたところで、ルル婆がにんまりと笑った。

「ほお……これはまた」

鑑定というのは魔法の一種で、相手のレベルやスキル、ステータスなんかが分かるらしい。使える魔法使いはほとんどいなくて、冒険者ギルドとかに行けば、鑑定の魔導具とかあるらしいけど。

冒険者でもない一般人は、みんな自分のレベルやステータスなんて気にせず暮らしていると思う。
隣のテリテおばさんだって、自分のレベルなんて知らないだろうし。

そういえば、さつき父ちゃんが、ルル婆を大賢者って呼んでたような気がするけど……？

「レベル、596じゃの」

「……。はあ!?」

「……こりゃたまげたの」

「……」

「やつぱり、というか……」

啞然^{あぜん}とする皆の中で、父ちゃんだけが眉間^{みけん}にしわを寄せて首をやれやれといった感じに振っている。

その父ちゃんに、ジェルおじさんが信じられない、という顔を向けた。

「ちよっと待て、ルル姐の見間違いないじゃなく？ ノアが、ノマドの仕事用の素材でいたずらして
る、って話じゃないのか？」

「それなら、緊急用のクルミなんぞ使わんさ」

「？」

オイラとしては、なんで父ちゃんたちが困った顔をしているのか分からない。

ここ数年、鉱石拾いと素材集めしかしてないし、この歳にしては取り返しのつかないほどレベル
が低いのだろうか？



でも、鍛冶屋にそこまでレベルが必要なことなんてないと思うし。

……っていうか、そもそも、その鍛冶についてすらろくに教えてもらってないんだった。今オイラに出来ることって、雑用だけ？

ひよっとしたら、鍛冶士になるには物凄くレベルが必要だったりするとか？

「なにか、マズイの？」

恐る恐る聞いたオイラの肩を掴んだまま、父ちゃんが大きいため息をついた。

なに、そんなにダメ？

「いいか、ノア。よく聞け。ここにいるジェルは、前代の勇者だ。王都に現れた強力なアンデッドを倒し、『不死殺しの英雄』とか『英雄王』と呼ばれている。そのジェルでさえ、今のレベルは……」

そこで父ちゃんがチラッとルル婆を見る。

「249じゃの。というかお前さん、わしやらと別れてから、ひとつもレベルが上がっておらんじゃないか。いくら王様稼業とはいえ、鍛錬をしゃぼってはいいかんの」

「あれからもう十五年だというに」

「わしやらは20は上がったに」

「英雄王などと呼ばれて天狗になったかの」

「腹のあたりもゆるんでおるようじゃしの」

「しょんなんだから、オムラに袖にしゃれるんだわ」

ルル婆とララ婆に口々に言われて、ジェルおじさんはしなびた菜っ葉みたいになった。

「つて、えっ？ ジェルおじさん、王様？」

「驚くところこかよ。っていうか言ってなかったか？ このデントコーン王国の百七代目国王、

ジェラルド二世、略してジェルだ」

「ほえー」

父ちゃんの言葉に思わず、しなびたジェルおじさんを二度見する。

ジェルおじさん、いつもオイラをかまいすぎて、ちよっとうっとうしいとか思ってたごめんなさい。まさかそんな偉い人だったとは。

「ともかく、そのジェルさえレベル249、戦闘職でない俺で80ちよいってとこだ。自分で言うのもなんだが、伝説の鍛冶士レベルで80。今の、平和な世の冒険者たちだと、駆け出しで10、ベテランで40、上位でも60ってとこか。で、お前のレベルは？」

「あれ？ いくつだっけ？」

ど忘れしたオイラが、ちらっとルル婆を見つめると……

「596だ、596！」

父ちゃんにつっこまれた。

あれ？ おかしいな。

なんで父ちゃんが常識人で、オイラが非常識みたいなくりになってるんだろう？
すごく心外だ。

「えーと。なんで？」

「それを俺が聞いてるんだよお」

ついには頭を抱えられた。

あれ、なにこの扱あつかい。普段と逆すぎてついていけない。

「つてか、それじゃ、オイラ、鍛冶士になれるつてこと？ 鍛冶士になるのにレベルが低すぎるんじゃない、つて心配してたんだけど」

「……どこの鍛冶士に、596なんてレベルが必要だつーんだ」

さらには、なんだか可哀そうなものを見る目で見られた。

「とにかく落ち着け、ノマド。何か心当たりはないのか、ノア？」

さすがは王様、いち早く立ち直ったジェルおじさんが……と思ったら、珍しくたくさんしゃべったマツ翁だった。ジェルおじさんは、まだ部屋の間すまでしなびていた。

「うーん。オイラがここ数年やってたのは、鉱石拾いと素材集めだけだよ？」

「鉱石拾いと素材集めつて、ノマドの鍛冶の材料かい？ 仕入れなくて、自分で集めてたのかい？」

「あはは、うちにオリハルコンだのミスリルだのを仕入れられるお金はないよー」

パタパタ手を振って軽く流したオイラを通り越して、ララ婆が父ちゃんに詰め寄った。

「ノマド。あたしはキツチリ、材料代も含めて前払いで渡したと思うんだけどね。なんでノアちゃんが鉱石拾いなんぞしとるんだい？」

「いやー、その」

父ちゃんの目が激しく泳いでいる。

「だめだよ、ララ婆。父ちゃんに金なんか持たせちゃ。鉱石なんて買う前に、あつと言う間に酒代のツケで消えちゃうんだから。ツケを払っても金が残れば、居合わせた全員におごつて騒いで終わり。いっそ清々すがすがしいよね」

オイラにとっては、もはや怒りも呆れも通り越して、ほほ笑ましいとすら思える父ちゃんの生態だけれど、ルル婆とララ婆はそこまで達観たつかん出来ないようだった。

「ノーマードー！」

いい歳をして床に正座させられた父ちゃんの横では、まだジェルおじさんがしなびている。王様のくせに、メンタル弱いよね。

「で、ノアちゃん。鉱石拾いつて、どこで？」

「そりゃもちろん、最初は裏の荒野で」

「「……」」

「え？ 近いし？」

なぜか皆絶句していた。

聞いてみると、冒険者は最初、王城の近くにある『始まりの洞窟』で、レベル5くらいまで修練を積むそう。次に、王都近郊の畑や村を荒らす猪やゴブリンなどの退治を請け負う。

レベル10で『獣の森』に挑み、レベル20で王国の西にある砂漠地帯や各地にある中級ダンジョンに、レベル40で『大湿原』や『霧の森』、さらに上位冒険者が『無限の荒野』や上位ダンジョンへ

挑戦、という流れらしい。

現時点で、『竜の棲む山脈』へ挑戦出来るレベルの冒険者はいないそうだと。もちろん、ルル婆やララ婆なら行けるんだろうけど、もう二人とも現役は引退している。

「まあ、オイラは冒険者じゃないし？」

「普通は冒険者じゃないもんは、魔獣のいるエリアに近づかないもんだよ」

「だって、最初父ちゃんに、『最果ての亀裂』でオリハルコン拾って来い、って言われたし」
びきびきつ、とララ婆のこめかみに青筋が立った。

ララ婆の投げた短剣が、抜き足差し足で逃げようとしていた父ちゃんの頬をかすめて、後ろの壁に突き刺さる。父ちゃんの頬から、たたり、と血がたれた。

「ノーマードー！」

「オ、オムラは普通に行ってたぞ」

「オムラは史上最高レベルの聖騎士だっただろうが！ たかだか十四やそらの子どもに、なんてこと言ってるんだいっ」

「あ、八歳の時」

今度は青筋を浮かべたルル婆に、父ちゃんは正座のまま水に漬けられた。

魔法って便利だね。

「あ、死なない程度でやめたげて」

「まったく、ノアさんは苦勞するねえ。鍛冶屋なんかやめて、あたしゃんとこおいでな。立派な

盗賊にしたげるから」

抱きしめられてナデナデされるのは気持ちいい。たとえその相手が、オイラより小さな婆ちゃんだとしても。

「残念だけど、ララ婆。ダメダメでも、オイラは鍛冶してる父ちゃんが好きだから、盗賊にはなれないよ」

「また、しょんなこと言って。何回誘ってもこれなんだから。ホントに、オムラそっくりだよ、この子は」

ララ婆が言うには、母ちゃんも、鍛冶以外ダメダメなところがまたかわいい、と言って父ちゃんを甘やかしていたそうだと。

ん？ オイラが苦勞してるのは、ひよつとして母ちゃんのせい？

「ところで、ノアしゃん。聞きたいことがあるんじゃないかね。その首巻き」

父ちゃんを水に漬け終わったルル婆が、オイラの首元の黒いもふもふを指さした。

「それ、魔獣だろ？」

03 チート魔獣チギラモグラ

「魔獣だど!?」

それまで、水がめの側の壁ぎわでしなびていたジェルおじさんが、すごい勢いで詰め寄ってきた。「魔獣の王都への持ち込みは、王国法第四百七十七条によって禁止されている！ 例外は、魔獣使い^{めんきょ}免許持ちの使役獣のみだ。ノア、お前、テイマー免許は？ 魔獣は、何であれ全て危険なんだ。使役されていない魔獣なんて、歩く災害と同じなんだぞ」

いつもヘラヘラしているか情けないかのジェルおじさん。その真剣な顔を初めて見た。

「テイマー免許？」

「持っていないのか？ ということは、それは野良魔獣！ 討伐対象だ！」

普段の穏やかさをかなぐり捨てて、ジェルおじさんが剣の柄に手をかける。

「おい、ジェル！」

「黙れノマド！ 人里に降りた魔獣は倒さねばならない。それが法だ！」

「あの魔獣は、ノアの首にいるんだぞ！ お前はノアの首をはねるつもりか!?」

「ノアの首になんて、かすり傷さえつけやしないさ！」

引き抜かれたジェルおじさんの片手剣が、逆袈裟切りにオイラの首元へと迫る。

あれは確か、三年前に父ちゃんが打った【希少級】。さすがは父ちゃんの作、【伝説級】には及ばなかったけれど、綺麗な剣だ。ジェルおじさんの剣をよける間、オイラはそんなことを考えていた。

「大丈夫か、ノア!?」

「……よけた、だど!?」

愕然とするジェルおじさんの一方で、心配した父ちゃんがオイラに駆け寄り、オイラの全身を触

りまくって、ケガがないかどうかを確かめている。

ルル婆とララ婆には、オイラがよけたのが見えていたみたいだけど、戦闘職じゃない父ちゃんは見逃していたようだ。

さつきルル婆に水漬けにされた父ちゃんは、まだぐっしりと濡れている。大丈夫だから、あんまり触らないでもらいたいなあ。ってか父ちゃん、風邪ひかないといいけど。

「大丈夫だよ、父ちゃん。オイラも、黒モフも」

オイラはそう言って、ジェルおじさんの殺気におびえて、胸元にもぐりこんでしまった黒いもふもふを掴み出して見せた。

とは言っても、よっぽど怖かったのか、またすぐにもぐってしまう。

その黒モフをルル婆たちがまじまじと覗き込む。

「黒モフ？ その魔獣の名前かい？」

「なんとまあ、ノアしゃん。魔獣に名前をつけているのかい」

「ジェル坊、ちよっとは落ち着きな」

「そうじゃ。法じやなんのと、お前しゃんは肝っ玉がちいしやいのう」

「しかし、ルル婆」

ジェルおじさんがそう口走った瞬間。

ルル婆の額に、特大の血管が浮かんた。

どす黒いオーラがゆらりと立ち上る。これはまずい。

ゴカッツ!!

と盛大な音を立てて、ジェルおじさんの顔面にルル婆の魔法の杖が沈んだ。

ジェルおじさんの、壮年^{そうねん}にしては端整^{たんせい}な顔が、泡を噴きながら後方に飛んだ。

ルル婆の魔法の杖は、極大の魔水晶^{ますいしやう}がついた特注品だ。父ちゃんの師匠^{ししょう}に当たる名工^{めいこう}の作で、魔法の効率がとても良くなるとルル婆愛用の品で。

もちろん、殴^{なぐ}られると、とても痛い。

「わしやが、なんじやつて? ジェル坊」

ルル婆、ララ婆の呼び方には、絶対のルールが存在する。つまり、二人を『婆ちゃん』と呼べるのは、この世でオイラだけ。父ちゃんやジェルおじさんは、『姐さん』と呼ぶのが決まりだ。

英雄王さえ足蹴^{あしげ}にする、絶対強者。それが大賢者ルルと大盗賊ララ。

つて、大賢者なのと大盗賊なのは、ついさつき知ったんだけども。

「……ル、ルル姐さん……」

「そうかい、さっきのは、わしやの聞き違いじゃね?」

「あたしやにも、聞こえた気がするけどねえ」

ララ婆にまでジロリと睨^{にら}まれ、ジェルおじさんは首をブンブン横に振ると、そのまま青い顔をしてカクツと倒れた。

返事がない。……ただの気絶体のようだ。

「さて、ノアしゃん」

ジェルおじさんが気絶しているのを確かめると、ルル婆が笑顔でオイラに尋ねる。

「スキルポイントに、余りはあるかの?」

オイラは首を傾げる。

この世には、スキルポイントというものが存在する。経験値をためることでレベルが上がり、レベルがひとつ上がるごとに、好きなスキルにひとつスキルポイントをプラス出来る。スキルの種類は数知れず。

また、種族ごと、職業ごとに固有のスキルというものもある。例えば、母ちゃんは鹿の獣人だったから、鍛冶スキルを選択することが出来なかった。そのぶん、父ちゃんの選択肢にない、治癒^{ちゆ}や聖魔法、といったスキルがあった。

オイラは父ちゃん似で良かったと思う。

鍛冶のない人生なんて人生じゃない!

つて、その鍛冶すら自己流なんだけど。

ちなみに、普通の仕事をしてても経験値は得られる。戦闘職じゃない父ちゃんのレベルが80なのは、そんな理由からだ。とは言っても、普通の仕事より魔獣と戦闘したほうが多くの経験値を得られるのは間違いなく、当然、一般人よりは冒険者のほうがレベルは高い。

また、経験値を得たものごとにスキルポイントを振る必要は全くなく、剣での戦いで得たスキルポイントで魔法のスキルを獲得^{かくとく}、なんて裏技も存在する。というか、最初は魔法なんて誰にも使えないわけで、そうでもないかと魔法使いなんて生まれません。

で、オイラのスキルポイントに余りがあるか、というと。

「んー、昨日鍛冶スキルに全部振っちゃったばっかりだから、今はないかな」

「しょのようじゃな」

再びグルグル眼鏡をかけたルル婆が、オイラをじつくりと眺める。

鑑定って、レベルやステータスの他に、スキルポイントまで見えるんだ。

婆ちゃんたちが考え込んでいる間に、オイラは土間から上がった先の板間に座布団を並べ、火鉢の上に載っていた鉄瓶からお湯を注いで玄米茶を淹れる。普段は番茶だから、戸棚の茶筒に玄米茶が残って良かった。なんでか、婆ちゃんたちっていうと玄米茶がするんだよね。

「スキルポイントに余裕があれば、ジェル坊が寝てる間に、ティマースキルを1でも振らせて、ティマー免許を申請しまおうと思ったんだけどねえ」

「ジェル坊は、魔獣にやトラウマがあるからねえ」

「ああ、あれか……」

父ちゃんとマツ翁は思い当たることがあるのか、うんうんと頷いている。

オイラの用意した座布団にマツ翁がどしりと腰かけると、床板がギシッと悲鳴を上げた。

うち、結構古いからなあ。床、抜けないといけど。

「ん？ ちょっと待って。ティマー免許って、そんな簡単に取れるの？」

「ティマースキルさえあることが、冒険者ギルドで確認出来ればね。スキルの有無は、魔道具で簡単に分かるからの。冒険者登録をして、しょのまま申請しまえばいい」

首を傾げたオイラに、ふわふわと浮いたまま玄米茶をすすっているルル婆が説明してくれる。

「なるほど……って、冒険者登録？ オイラが？」

「冒険者登録をしている鍛冶士だっているしゃね。しょこのノマドのように」

オイラはびつくりして父ちゃんを見つめる。父ちゃんが冒険者をしていたなんて知らなかった。

「……オムラに付いて行きたかったんだよ」

ぶいつ、と明後日のほうを向いて、父ちゃんがボソツと言う。

やばい、照れてる父ちゃん、かわいい。

「まあ、ノアがその魔獣を捨ててくる、ってのが一番の近道だが」

「待て」

父ちゃんの、照れ隠しにしてはヒトデナシな言葉に、意外にもマツ翁が待ったをかけた。

マツ翁は見た目に似合わず猫舌で、でっかい手のひらにちよこんと湯呑を置いたまま飲めずにいる。

「その魔獣……チギラモグラじゃないのか？」

「チギラモグラ？」

聞いたことのない名前に首を傾げると、ララ婆が驚いたように湯呑をガツツと置いた。

「チギラモグラだって!? あの、冒険者垂涎の、経験値オバケ!?」

「経験値オバケ？」

「ほっほっほ。さすがはマツ。よく分かったねえ」

鑑定を使って黒モフも見たのか、ルル婆が笑顔で肯定する。

「チギラモグラってのはね、『無限の荒野』だけに現れる、レア魔獣でね。攻撃力も防御力もないんだが、とにかく逃げ足が速い。見かけるのも奇跡、攻撃を当てるのはさらに奇跡、けどもし倒せたら……。とてつもない経験値が手に入るんじゃないよ。見たら即攻撃、が、鉄則の魔獣。なんじゃけど……」

「けど？」

「どうやら、わしやは、とんでもない早合点はやがてんをしていたみたいじゃわ」

「早合点て？ もったいぶらんで、早く言ってくれ、ルル」

せつつくララ婆に、ルル婆がにんまりと笑った。

「見かけたら脊髄反射せきずいはんしよで攻撃しとったから、今までチギラモグラの鑑定なんぞしたことがなかったが、コイツ、とんでもないユニークスキルを持つちよる。なんと、パーティメンバー全員に、獲得経験値五倍、じゃ」

「二倍経験値五倍っ!?」

オイラとルル婆以外の声が、綺麗にハモった。

04 オイラの何の変哲もない日常①

「なに、それ？ すごいのか？」

首を傾げたオイラの肩をルル婆が掴み、ぐわんぐわんと前後にゆする。

ちよっ、お茶がこぼれるっ。

「知らなかったのかい!? 経験値五倍ってこたあ、普通の五倍の速さで経験値がたまる、つまりレベルアップ出来る、ってことだよ！ 知らずに、なんでこんな魔獣とパーティなんて組んでるんだいつ？」

「え？ 拾ったから？」

「拾ったあ？ 逃げ足だけとはとんでもない、チギラモグラを？」

ルル婆の眉が、きれいに八の字に寄った。

「五年くらい前だったかな？ 今よりずっと小さくて、ホントに毛玉みたいで。弱ってるみたいだったから、オイラの弁当を少しやつてみたら、食うわ食うわ、あつという間に弁当全部食べちゃって。そしたら、なつかれちゃってさあ」

「『無限の荒野』で？」

「『無限の荒野』で」

「はあ……」

ルル婆にもため息をつかれた。

「でも、パーティなんて組んでたかな？ まあいいや。ララ婆、要するに、レベルがひとつ上がったスキルポイントが手に入れば、黒モフを連れてても良くなるんだよね？ 放そうにも離れないし、オイラもなんだかんだで愛着があるし、べつにジェルおじさんが言うみたいな悪い奴には思えないし。出来れば、このまま飼ってやりたいんだ」

ジェルおじさんが気を失って安心したのか、ふところから少し頭を覗かせて、おどおど周りを見回している黒モフを、オイラはそつと撫でた。

大きな目を嬉しそうに細めた黒モフに、やつぱりオイラは、こいつのことが好きなんだと思う。オイラには経験値とかレベルとか、そんなには必要ないけれど、こいつはオイラの友達だ。捨てるなんてとんでもない。

「そうは言ってもね、ノアしゃん。レベルっていうのは、高くなればなるほど、上がりにくくなるものなんじゃよ。現にわしやは、レベル623じゃけれど、600からこまで上げるのに、十五年かかったんじゃ。ノアしゃんはレベル596。ひとつ上げるのに……はて、その魔獣の力があつても、ひと月にかかるじやろうて」

浮いたまま鉄瓶から急須にお湯を入れ、おかわりを注いだ婆ちゃんたちが渋い顔をする。

え？ とオイラの頭に疑問符が浮かぶ。

「ひと月？ いや、ちょっと待っててよ。そんなにかかんないと思うし。試しに……うん、二時間

くらい待っててくれる？」

「二時間？」

「うん、ちょっと友達に会ってくるから」

「友達？」

ふよふよと浮きながら、体ごとそろって首を傾げるルル婆とララ婆に、ようやく一杯目のお茶をすすめるようになったマツ翁がゆっくりと声をかける。

「ルル姐、ララ姐。五年前からチギラモグラのスキルがあつたとしても、計算が合わない」

「は？」

「……しyouか。毎日毎日、『無限の荒野』で魔獣を狩ってたとしても、五年でレベル100にしゅらとても届かないじゃろう。獲得経験値五倍があつたとしても、普通の手段で、十四歳で596になんてなりっこないわの」

「どういことだ？」

「ノアしゃん。普段ノアしゃんがしてることを、しよっくりそのまま、やってみせてくれましょかねえ？」

いつにない丁寧な口調で、ルル婆に凄みのある笑顔を向けられたオイラは、黙ってこくこくと頷くしかなかった。

「えーと、まず、朝、父ちゃんのご飯を用意して」

土間にあるかまどの前で、オイラは説明を始める。この時点で、既に父ちゃんはルル婆に睨まれ

て体を小さくしている。

ちなみにジェルおじさんは、ルル婆に睡眠の魔法を重ね掛けされて、あと四時間ほどは起きないそう。父ちゃんもルル婆の魔法で乾かされていた。

「まだ父ちゃんは寝てることも多いし。父ちゃんのお昼ご飯用のおにぎり、漬物と、オイラと黒モフの弁当のおにぎりもここで一緒に作って。……ほんとに作る？」

「今日は二時間でレベルアップという目的があるからね。はしょってはしょって」

「じゃ、次は倉庫に移動」

オイラの後について、ルル婆とララ婆、マツ翁に父ちゃんがぞろぞろと移動する。

本来の鍛冶屋の倉庫には、今はほとんど何も入っていない。

オイラが集めた鉱石や素材も最初はここに入れていたんだけど、酔っぱらった父ちゃんが次々に持ち出して酒に変えちゃうんで、オイラは父ちゃんの倉庫の裏に、自分用の倉庫として穴を掘っていた。入り口は小さいものの、数年をかけて拡張に拡張を重ねたそこは、もう父ちゃんの倉庫よりもずっと広くなっている。

父ちゃんにオイラの倉庫の中身を見せるのは、また色々と売られそうで不安。

だから、ルル婆たちには父ちゃんの倉庫のところで一旦待ってもらって、オイラは自分の倉庫から、鉱石や素材拾い用の装備を取ってきた。

身の丈^{たけ}ほどもあるバカでかい古いリュックと、自分で打った剣が三本。一本は腰に、残りの二本はリュックにくくりつけてある。

なんで三本なのかというと。

剣には耐久力というものがある。

何度も何度も戦っていると、剣は疲れ、その内に割れたり折れたりしてしまう。

軽い剣は速く振れるけれど耐久力が低く、重い剣は速度は遅くなるけれど耐久力が高い。剣の『耐久力』『速さ補整』『攻撃補整』『防御補整』は、鍛冶スキルの『武具鑑定』で数値化して見ることが出来る。

マツ翁みたいな重戦士なら、重くて耐久力の高い剣でもいいんだろうけれど、オイラみたいなチビはスピード重視。折れること前提で三本持つていく、というわけだ。

ちなみに、オイラが自己流で打った剣にちょうどいい鞘^{さや}なんて毎回用意出来るはずもなく、剣は全部、ボロ布でグルグル巻きた。

「剣が、三本」

「そいつあ、ノア、お前が打ったのか？」

父ちゃんは布を取って中身を見たそうだったけれど、今日は黒モフのため、なるべく急がないと。「そうだよ。毎日、鉱石を拾ってきては練習してるんだ。父ちゃんみたいにはまだ打てないけど。それで、その打った剣を持って、また鉱石を拾いに行く」

ちよっと感心したようなビククリしたような父ちゃんの表情に、鼻の奥がムズムズする。

どうだい、ちよっとはオイラを見直した？」

いつか、父ちゃんを超えるような剣だって、打ってみせるんだから。

「で、走る」

水筒を腰にくくりつけると、オイラは一、二回その場でびよんぴよんと飛び跳ねて、足の調子を確認。そのまま一気に加速して、『無限の荒野』へ向けて走り出した。

チラッと振り返ると、ルル婆とララ婆、マツ翁に父ちゃんが見る間に小さくなり、置いていかれたルル婆が慌てて何かの魔法を発動したようだった。

十分後、『無限の荒野』を走っているオイラのところに、ルル婆の魔法の長座布団に乗ったみんなが追い付いてきた。

普通よりはだいぶ大きい長座布団だけれど、だいぶきゅうくつに見える。

「ノ、ノアしゃんノアしゃん。ちよつと待ちんしゃい」

スピードのせいかな、切れ切れに聞こえる声は、かなりきつそうだ。

さすがのルル婆でも、マツ翁を浮かせて運ぶのは大変なんだろうな。

「急がないと、ジェルおじさんが目を覚ますのに間に合わないよ？」

「た、ただ走っただけでこのスピード……それに、途中で何匹か魔獣がおったが……」

そういえば、途中で何かいたような気がする。

鍛冶の素材になる魔獣じゃなかったから、あんまり気にしなかったけど。

「あ、あれ？ よけたよ？」

「よけた!? 岩オオカミと、鬼アザミ、針トカゲを!? ベテラン冒険者だって、数人がかりで相手にする魔獣だよ!」

荒野に出てくる魔獣って、そんな名前なんだ。岩オオカミと針トカゲは、見たまんまの名前だな。

「オイラ、逃げ足だけは自信あるんだよね。素材になるなら戦って回収することもあるけど、今日は急いでるからね。早くエステイのここに行かないと」

「エステイ？」

「そ。オイラの友だち。ルル婆たちは？ 魔獣どうしたの？」

走りながら聞くオイラに、ララ婆が胸を張った。

「ふん、しょんなの、あたしゃの投げナイフで一撃だよ」

「すごいねえ。でも、投げちゃったナイフがもったいないね。帰りに回収してる時間、あるかな？」

「盗賊は投げナイフが得意だからね。みんな、『ナイフ回収』のスキル持ちなのしゃ。当然、あたしゃもバッチリ回収してるよ」

そう言って、ララ婆は腰のホルダーから取り出した投げナイフを、片手に五本、カードのように広げて見せた。

「そんなスキルがあるんだね」

オイラの言葉に、なぜかルル婆が得意そうに笑った。

「ほっほ。わしゃの魔法の座布団の最高スピードに乗っておって、ナイフを投げて魔獣に当てるなんて軽業なわばねしてるのは、世界広しとはいえララだけしゃね」

「ちんまい頃から乗しえられてたからねえ」

「いざというとき、二人分の重さに慣れてなくちゃ、一緒に逃げられないじゃないか」

「ルル……」

「なんだい、今しやら感動したのかい？」

「大好きしや、ルル〜」

「ララ婆がルル婆に抱きつこうとしたところで、マツ翁がその襟首えりくびを掴んで止める。

「ララ姐、このままだと、竜の領域に入る」

「えっ!？」

「ララ婆が慌てて辺りを見回す。

話しながらも走り続けたオイラたちは、そろそろ『無限の荒野』を抜けて、『竜の棲む山脈』のふもとに到達とちたつしようとしていた。

「ノアしゃん!? あんたの友だちとやらのそこには、まだ着かないのかい!？」

「まだまだこれからだよ。オイラには慣れた道だけど、ルル婆とララ婆は、いちいち戦ってたら時間かかってしょうがないでしょ? どうする?」

「慣れた道、つて……」

「そういえば、さっきから何となく父ちゃん存在感がないな、と思っていたら、マツ翁の背中に寄りかかって目を回していた。

レベル80とはいえ、酒浸りさけひたのグータラ生活をしていた父ちゃんには、ルル婆の全力座布団疾走しつそうはキツかったみたいだ。

「わしやらのことは気にせんでええ。魔獣の知覚を外す魔法があるからの。わしやらよりレベルが

下の魔獣にしか効かんし、こっちから攻撃を仕掛ければ気付かれるが、ノアしゃんに付いて行くだけなら何とでもなる。ただし、わしやらもノアしゃんの手助けはせんから、しよのつもりでの」

「ちよつと、ルル!」

顔をしかめたララ婆に、ルル婆が穏やかに笑う。

「ええから。ええから。ノアしゃんの『いつも』を見せてもらうんじやる? 慣れた道と言うんじや。大丈夫なんじやろうて」

そうしてオイラたちは、『竜の棲む山脈』へと突入した。

05 神ノの鍛冶士マドから見た異常な日常

「ウソだろ?」

『無限の荒野』よりはだいぶスピードが落ちたせいかな、それまで目を回していた俺——ノマドは、ようやく意識がはっきりした。気が付いてみれば、周りは『竜の棲む山脈』……というのも相当にアレな現実だが、それよりも信じがたいものが俺の目の前にあった。

……ノアが、自分の子どもが、グリフォンのすぐ目の前にいる。

『竜の棲む山脈』とはいえ、『無限の荒野』から連なるふもと付近には、純粋な竜種は滅多に現れず、その眷属を含む様々な魔獣が現れる。グリフォンや大蛇、ワイバーン、タラスクタラスク（甲羅こうらのある

六本足のドラゴン）などの亜竜。様々なゴーレムに、竜を崇めるラミアやリザードマンなどの亜人。

竜の眷属たちは縄張り意識が強く、見慣れない生き物がいると普通は排除しようとする。

それなのに、ノアのことは、ほとんどの魔獣がチラッと見ただけで黙殺する。

まるで、竜の眷属同士のように。

いるのが当たり前であるかのようにだ。

たまに、血の気が多そうな若い魔獣が、ノアに襲い掛かることもある。

最初、それを見たとき、俺は思わず叫んだ。

「ル、ルル姐、ララ姐！ 助けて、助けてやってくれ！ ノアが……ノアが殺されちゃう！」

自分で助けに飛び出したいのはやまやまだが、俺の力では、グリフォンに一撃だつて当てるのは難しい。それどころか、ルル姐の魔法の座布団から、無事に飛び降りることが出来るかどうか。

取り乱した俺とは対照的に、ルル姐、ララ姐、マッセイ翁は不思議なほど冷静だった。

「なんだい、今ごろ気が付いたのかい。慌てることあないよ」

「そ、そんなこと言ったって、あれはグリフォンだ！ ノアがかなうわけない！ 熟練の冒険者パーティだつて、チームを組んで討伐する相手だ！」

「見りゃ分かるよ、しょんなこと。でも黙って見てな。いくらルルの認識阻害の魔法がかかっているとはいえ、大声を出しやあ気付かれなことも限らない」

「認識阻害？ そうか、グリフォンの意識がこつちに向けば、ノアが助かる確率が上がる！」
改めて叫ぼうとした俺の頭を、ルル姐の巨大な杖が小突く。

「やめんか、バカモノ。余計なことをしゅると、かえってノアしゃんの足手まといになるつてもんじゃよ」

そうこうしている内に、グリフォンの凄まじい攻撃がノアへと繰り出される。

グリフォンは、鷹の頭と翼、ライオンの体を持つ魔獣だ。空からの攻撃が可能な上、強力な四肢の一撃は岩をも砕く。もちろん肉食。

血ダルマになったノアの幻が脳裏に浮かび、俺は顔を絶望にゆがめる。

ところがノアは、慣れた様子でグリフォンの攻撃をひらりひらりとよけ、すれ違いざまに、一瞬、剣を抜いた。

キーン、と澄んだ音がしたと思うと、ノアの手には、グリフォンの巨大な爪が握られていた。ノアが剣で叩き斬ったのだろう。

グリフォンの爪は、滅多に流通しない鍛冶の希少素材だ。

よくやった、ノア！ と拳を握った直後、ふと思いついてサアツと青ざめる。

確かにグリフォンの爪は欲しい。でも、爪なんか折ったら？

鍛冶馬鹿と散々周りに言われている俺が言っても説得力がないのは分かっているが、いくらい素材が目の前にぶら下がっていたって、生きて持って帰れなくちゃ意味はない。

中途半端に傷つけられたグリフォンは、さらに怒り狂ってノアを追撃してくるに違いない。グリフォンにとって、爪の一本が折れたくらい、大したダメージにはならないだろう。

なんで俺は、鍛冶にばかりスキルポイントを振って、いざというときにノアを助けられるスキル

のひとつも取らなかった？ ノアもノアだ。戦い慣れているなら、素材を採る前に致命傷のひとつも負わせたらどうなんだ!? 半端に傷つけて手負いにするより、大技で行動不能にさせるか諦めて逃走するのが、魔獣と戦うときの鉄則だろう!?

手に汗を握り、必死に心の中で『逃げろ、逃げろ、出来れば爪を持ったまま、いやしかし』とか唸っている俺を尻目に、事態は意外な展開を見せた。悔しそうに一声うなったグリフォンへ、ノアが笑顔で「ありがとね」とか言って手を振ったのだ。

ふん、と鼻を鳴らして、グリフォンはくると後ろを向いて去っていく。

「……は？」

背を向けるグリフォンを指さし、目を丸くして振り返ると、ララ姐が軽く肩をすくめた。

俺は哑然としたが、ルル姐たちは既に見た光景だったのだろうか。やはり平然としていた。

そんなことが、何度も繰り返された。

さすがに『竜の棲む山脈』にいる魔獣は、『無限の荒野』の魔獣とはレベルが違う。

ノアのスピードをもつてしても、ただ走って振り切ることは無謀だろうから、戦うのは理解出来る。しかし、ウロコや爪、牙、羽を取られた……つまり、傷つけられた魔獣がノアを見逃す理由が分からない。普通なら、さらに怒り狂って追撃してくるはずだ。

『竜の棲む山脈』を登るにつれ、現れる魔獣もどんどん強くなっていく。ふもとと同じ種族の魔獣だったとしても、レベルが遥かに違う。

中腹にもなると、亜竜が増え、飛竜もぼちぼち現れ始める。

それでもノアは多くの竜種に無視され、襲われたと思えば器用に素材を剥ぎ取っていく。

殺しも、殺されもしない。

剥ぎ取った素材は、たまに拾っているらしい鉱石と共に、背中巨大なリュックに無造作に放り込まれる。

もはやかなりの重さになっているはずなのに、ノアの足取りに乱れはない。休憩すら挟まず、

『竜の棲む山脈』の急な斜面を凄まじい速さで登っていく。

そしてついに、中腹を過ぎる頃、ひとつの洞窟へと辿り着いた。

「ここが、目的地か？」

ルル姐の認識阻害の魔法は、魔獣だけでなく獣人にも効果があるらしいが、ルル姐がノアを仲間とみなしているので、ノアにも問題なく声が届くそうだ。

「そうだよ。ここは本来の入り口じゃないけど。この奥に、エスティがいる」

ここまで走りどおしだったのに、ノアには疲れた様子すらない。

あれだけ色々あったというのに、ララ姐に聞くと、家を出てからまだ一時間も経っていないらしい。

「そのエスティって人に会えば、レベルが上がるのか？ こんな『竜の棲む山脈』のど真ん中に……どんな大賢者だっつーんだ」

「大賢者として、こんなところに住むのはごめんじゃの」

「大盗賊とてごめんだの」

「……」

マツ翁の無口さは相変わらずだが、多分同じことを考えている。

「んー、それにしてももったいなかったな。途中の崖^{がけ}の上で、オリハルコンのにおいがしたんだけど、急いでたから素通りしちゃったよ。今度また探りに来なきゃ」

「オリハルコンににおいなんてあるのかい？」

「知らないの、ルル婆？ 鉄だつて銅だつて、においがするじゃない」

「鉄臭い、つてのは何となく分かるけどねえ」

「鍋^{なべ}で沸かしたお湯は、鉄臭いからねえ」

「犬^{オイラたち}の獣人は、鼻がいいから」

金属のにおいをかぎ分けられる、というのは、有望な鍛冶士の第一条件だと俺は思う。

そうすると、ノアには、鍛冶士の才能があるのかもしれない。

さつきちらつと見えた、ノアが打ったという剣は、刃紋^{はもん}も何もめちやくちな、習作と言うにもまだまだな出来だったけれども。おそらく、自分なりに速さを追及したのだろう。

俺たちは、ためらいなく進むノアに続いて、狭い洞窟を降りて行った。

ここからは徒歩で、と一旦座布団を降りたものの、早々に俺だけ付いて行けなくなり、問答無用で座布団に乗せられた。洞窟内にスペースがあまりないこともあり、各々固まらずに進んでいく。ルル姐は魔法で浮き、俺は座布団、ララ姐は身軽に徒歩で、マツ翁は鎧でゴリゴリと岩壁を削^{けず}りながら歩いている。坂道はもちろん、ときには崖のようになっている暗い洞窟を、ノアは危なげなく

ひよいひよいと降りていく。

犬の獣人は、割と夜目^{よめ}がきく。それでも、この暗い、岩と崖だらけの洞窟は危険極まりない。今更ながら、俺はノアのことを何も知らなかったのだ、と苦い思いがした。

「なんだか暑くなってきたねえ」

「なんだかわしゃ、嫌な予感がしてきたわ」

「……」

マツ翁も無言で頷いている。

洞窟を降り始めてどれほど経ったか。ノアと俺たちは、やがて赤い光で満ちた広い空間へと辿り着いた。

そして、軽い調子でノアが言う。

「他の誰かを連れてくる許可はもらってないから、怒られるかな？ 彼女が、エスティ。エスティローダ。火竜の、女王だよ」

その巨大な赤い竜は、威風堂々^{いふうどうどう}と俺たち卑小^{ひしょう}な人間を見下ろしていた。

06 オイラの何の変哲もない日常②

「彼女が、エスティ。エスティローダ。火竜の、女王だよ」

そうエステイを紹介した直後。

父ちゃんとオイラたちに、炎のブレスが襲い掛かった。

「あちゃあ、やっぱ無許可はまずかったか」

エステイのブレスには0・5秒の溜めがある。息を吸い込むための時間というか。

オイラは慣れもあって、ブレスの気配、エステイの顔の向きから、ある程度余裕をもってよけることが出来た。

跳んで避けたオイラのすぐ横を、ブレスが濁流のように通り過ぎる。

エステイの存在感に吞まれて動けずにいた父ちゃんたちは、まともにブレスを食らってしまった。

「エステイのブレスは初見殺しだよな。……エステイ！ あれはオイラの父ちゃんなんだぞ！ いきなり何するんだよ!」

当然というか、エステイのブレスは、ルル婆がとつさに張った魔法障壁によって防がれていた。

それでも相当焦った顔をしているから、不意打ちのブレスはキツかったようだ。

『父ちゃんだと？ 親を紹介するということは、人の間では、つがいになる前段階の行為だと聞く。我を娶る気にならなかったのか?』

エステイの顔の高さまで思いつき飛び上がり、顔面に向かって降り下ろした剣は、エステイの腕に簡単に阻まれ、ギャリンツと嫌な音を立てて砕け散った。

ここまで、だいぶ魔獣相手に使ってきたから、まあ、しょうがない。

柄だけになった剣を投げ捨てると、急いで壁を蹴って場所を移る。一瞬前までオイラのいた空間

を、エステイの炎のブレスが通り過ぎた。

投げ捨てた柄は、エステイの足元に広がる溶岩に落ち、ジュツと溶けた。

オイラは周囲の岩壁をあちこち蹴って跳び渡り、エステイの爪を避けながら、背中のリュックから二本目の剣を引き抜いた。

「いつもどこから、そんな偏った人間の知識をつ！ 聞きかじってくるんだよつ！ 友だちにっ！ 家族を紹介しちやダメなのかよつ!」

今持っている剣（二本目）が折れたら、全力で逃げる。最後の剣（三本目）が折れる寸前までいってしまったら、たとえエステイに勝てても、帰り道で死ぬ。

武器もなく通してくれるほど『竜の棲む山脈』の魔獣は甘くない。

というか、今までエステイに勝てた試しなんてないんだけども。

『我が棲み処にこそこそ無断で立ち入ったのだ。お仕置きくらいは当然であろう？ まして、あれは大賢者ではないか。あんなそよ風程度でどうにかなるほどの婆ではないわ』

こそこそと、いうことは、ルル婆の認識障害に気付いていたのか。前から強い強いとは思っていたけれど、やっぱりエステイのレベルはルル婆より上らしい。

「あんたに婆あ扱いしやれるいわれはないよつ!」

下のほうで、ルル婆が何やら元気に叫んでいる。竜は長生きだと聞いたから、エステイも本当はルル婆より年上なのかもしれない。

オイラは魔法が使えない。

一度でも空中で捕捉はとくされたら、叩き落とされて、それでジ・エンドだ。落下の衝撃を弱める『浮遊』も、空中移動の向きを変える『飛翔』も使えない。周りの岩壁を蹴り渡るスピードを殺されたら。

ただ落ちて潰れるトマトに同じだ。

そもそも、オイラの防御力は紙も同然。エステイでなくても、『竜の棲む山脈』の魔獣の攻撃を一撃だつて食らえば致命傷だ。オイラの持つ剣だつて、エステイの攻撃をまともに受ければ、あつという間に砕け散るだろう。

オイラに出来るのは、ただひたすらに攻撃をよけながらのヒット・アンド・アウェイ。

エステイの攻撃は足でよけ、こちらからの攻撃のみの使用とはいえ、それでも剣の耐久力はゴリゴリと削れていく。

『確か、あの婆とは百年ぶりくらいかの？ 以前に会った折はまだほんの小娘だったか。少し見ぬ内に大賢者とは、大した出世よの』

「わしやは、まだ百年も生きちゃいないよつ」

エステイの翼から、かまいたちが放たれる。無差別&広範囲に繰り出される、無数の真空刃しんくうばは、ひとつひとつの威力はさほどではないものの、全て避け切ることとはかなり難しい。防御力が無に等しいオイラにとっては、プレスより遥かに嫌な攻撃だ。岩陰に隠れたとしても、機動力を殺すことは死につながる。かまいたちが過ぎ去った瞬間、エステイの爪や尾に殺されるだろう。

宙に浮いたままでは、かまいたちを避け続けることは出来ない。オイラは岩壁を一気に走り降り

た。たとえば壁でも、走っているなら避けられる。

かまいたちは、基本、透明だ。

最初に放たれたときは見事に一発くらって、それでもなんとか首の皮一枚で生き残り、治癒ちゆの柿をかじりながら、命からがら逃げ出したつけ。それから、かまいたちを出されるたびに一目散に逃げ続けて、数十回目の挑戦でようやく『見える』ようになった。

こっちに向かつてくる空気の揺らぎが、見分けるポイント……と言いたいところだが、無風の空間をやつて来るただ一発のかまいたちならともかく、エステイはしつちやかめつちやかの乱気流の中に、わざと無数の小さなかまいたちをまぎれさせてくる。

慣れとカン、そして微妙な違和感。

かまいたちの到達する前の一瞬、かすかに濃くなるエステイのにおい。

無意識の中の、刹那せつなの判断だ。

今では、集中さえ途切れなければ、ほぼかすることもなくなった。

剣は攻撃のために温存。

ひたすら足でよけ続ける。

重要なのは、かまいたちを放っている間は、たまにプレスが降ってくることはあっても、爪や牙や尾が飛んでくることはないってことだ。つまり、オイラにとって、地面に足がついている限り、今が絶好のチャンス、つてわけ。

かまいたちが一瞬途切れた隙に、オイラは胸元の金具を外した。

しゅるっ、とリュックの背負い紐が自重に引かれて後ろに流れた。

ドシンツツツと重い音を立ててリュックが地面に激突し、オイラはさらに加速する。

リュックを手放せば剣の補充は出来なくなるし、回復の柿も取り出せない。けれどそのぶん、小回りがきく。

次の一撃で仕留められなければ、後はない。

でもそれは、いつものこと。

かまいたちの合間に繰り出されるブレスに追われつつ、オイラはエステイへと一気に駆け寄った。そのままエステイの股の間を走り抜けると、尻尾からその左肩目がけて必死に駆け上がる。

エステイの皮膚は高温の炎をまとっている。炎に強い鍛冶屋のブーツの面目躍如だ。それでも、足の裏にじゅわつと嫌な感触がする。だけど、このスピードなら焦げたにおいは後ろに置き去りになつて鼻へは届かない。

左肩の後ろに、一枚だけ、わずかに色の薄いウロコがあった。

オイラの狙いはコレだ。

戦いながら、全身をくまなく観察して見つけた。

オイラはウロコの隙間に下から剣を潜り込ませ、渾身の力を込めて切り上げる。

パキイイインツツツ！

「やったあ！！！！ とつたよおおおおつつつつ！！！！」

キレイな金属音を立てて、オイラの剣は真つ二つに折れてしまったけれど、その代わり、オイラ

の手にはエステイの大きな真つ赤なウロコが一枚握られていた。鍛冶屋の手袋を通して、じんわりと熱さが伝わってくる。

ウロコを剥いだ勢いでそのまま背後にすつ飛んだオイラに、エステイの手が伸びる。

……そして、そのまま優しく受け止めてくれた。その手のひらに、既に炎はない。

『やられたのお』

「エステイ、後ろにはブレスしないからさ。かまいたちもだいぶ見えるようになったし！」

『段々と強くなっていくのお。我も、いつも次が楽しみでならぬ』

エステイはそのまま人型に変化すると、横抱きにしていたオイラを地面に降ろしてくれた。

元が巨大なエステイは、人型になつても父ちゃんより背が高い。深紅の長い髪に、炎のようにグラデーションのかかったドレス、ガーネットの瞳。驚くほどの美人さんで、その迫力も驚くほどだ。多分、人型で街に降りても、一発で正体がバレる。

「だ、大丈夫か、ノア!?」

そこに、父ちゃんが走り寄って来た。オイラを心配して来てくれたんだろうけれど、耳は後ろにペタリと寝て、尻尾もくると股の間に挟まっている。ガタガタぶるぶると震えていて、怖いのに相当無理をしているようだ。

犬の獣人は、いくら表面を取り繕っても、内心がしつぽに表れるから不便だね。

まあ、そのぶん、真正直な一族として一部では就職が有利だったりするみたいだけど。

「大丈夫だよ、父ちゃん。ほら、この通り。無事にウロコもゲット出来たしさ」